

抗加齢医学

“不老長寿”をめざす米国の最新医療

ロバート・ゴールドマン

聞き手: 佐多保彦 株式会社東機買 代表取締役社長



佐多: ゴールドマン博士は、米国抗加齢医学会 (American Academy of Anti-Aging Medicine; 通称A4M)の会長を務めておられます。抗加齢医学が、医療の一分野として認識されるようになったのは、いつ頃ですか。

ゴールドマン: A4Mが、第1回の会合を開いた1993年頃からだと思います。私たちはまず「老化」あるいは「加齢」の概念を変えようという試みから出発しました。医学の歴史はヒポクラテスの時代から、病気と年をとることの間にはっきりと線を引いてきました。病気は、健康あるいは正常な生活から逸脱すること、年をとることは、太陽が沈むとか我々が重力に逆らえないのと同じように、避けられないこととして来しました。医師たちは、病気は治そうと試み、老化はただ受け入れてきたのです。私たちは、年を取るというプロセスそのものが一つの病気なんだ、従って老化の治療は可能なんだと主張したわけです。その時の出席者は50名ほどでしたが、現在、A4Mでは世界55カ国から集まった8500名のメンバーが活動しています。メンバーの80%が医師、12%がその他の科学者、研究者、医療従事者、8%が一般の方々です。

佐多: 具体的には、どのような活動をされているのですか。

ゴールドマン: 抗加齢医学には、生物学、診断学、検査技術、栄養学、スポーツ医学など様々な分野の要素が関連しています。こうした分野の先端テクノロジーをすべて駆使して抗加齢医学を考えるという基本コンセプトで、医療技術の研究、薬剤の開発、医師を対象にした教育プログラム、臨床研究援助、抗加齢医学に取り組む開業医のサポートなどを行っています。そのほか、広報、政府関係者への教育、法的整備などにも関わっています。

佐多: 抗加齢医学でもいろいろ研究がなされていると思いますが、近年特に注目を浴びているのが“ヒト成長ホルモン”(Human Growth Hormone; HGH)だそうですね。HGHに関しては若返り (to reverse aging) という言葉が頻繁に使われていますね。

ゴールドマン: 人間の老化は35歳前後で始まり、ゆっくり進行していきます。これはホルモンの働きの低下が原因なのではないかという考えから、年を取ると失われていくホルモンを高齢者に投与して、その変化を観察する研究が始まりました。1985年に初めてGH (Growth Hormone) に若返りの効果があるという論文が発表され、1990年には、12人の被験者を対象にした臨床研究で、その驚くべき効果が証明されました。現在実証されている効果としては、脂肪の減少、筋肉の増強、エネルギー・レベルの向上、免疫力の強化、皮膚の弾力性、しわの除去、視力の回復、睡眠の質の向上、血圧・コレステロールの低下、骨塩量の増加などがあります。

佐多: GHは実際、どのように使用されているのですか。

ゴールドマン: 若返り目的でのGHの利用法には2通りあります。1つ目はHGH注射、2つ目はGHを外から注入するのではなく、その人自身のGHの自然生成を促したり、またこうして蓄えられたGHの分泌、放出を促進したりする物質 (リリーザー) を摂取するものです。現在70代、80代の人約38%が成長ホルモン欠乏症だといわれており、この場合には、小人症の患者にHGHの補充が必要なのと同じように、1日1本ないし2本のHGH注射が必要です。今は、口腔粘膜吸入法も利用できます。そうでない人は、2つ目のリリーザーによるプログラムが適当です。

はじめに、自分に合ったプログラムを作り上げるために、自分のGHがどのくらい欠乏しているのかを知らなければなりません。点数式の簡単な自己診断テストがありますが、確実に知るためには、医療機関で、IGF-1 (Insulin-like Growth Factor-1) レベルか、あるいは直接GHレベルを検査しなければなりません。これらによって、外からGHの補充が必要か、あるいは自分の体内のGHを活用するだけでよいかを診断します。それから人それぞれに適したプログラムを組み立てることになります。

佐多: GH関連以外のアンチ・エイジング・プログラムには、どのようなものがありますか。

ロバート・ゴールドマン / Robert Goldman, M.D.

American Academy of Anti-Aging Medicine会長の他、National Academy of Sports Medicineの会長も務める。スペシャリストとして多くの国際医療機関の設立に関わり、またハーバード大学大学院、タフツ大学、オクラホマ州立大学などで教鞭をとる。米国赤十字社、NASA、国防省、FDAなどの開発プログラムに参加。Gold Medal for Science('93)、Grand Prize for Medicine('94)、Humanitarian Award('95)、Medical Business Development Award('96)を受賞。空手の黒帯保持者でもある。

* 日本抗加齢医学研究会

〒105-0004 東京都港区新橋1-12-5(十仁病院内)

Tel: 03-3571-1221 Fax: 03-3571-3118

代表幹事: 渡辺慶一(前東海大学医学部病理学教授)

ゴールドマン: ホルモン補充療法として、エストロゲン、プロゲステロン、テストステロン、DHEA、メラトニンなどが使用されます。ホルモン以外では代謝、免疫、あるいは抗酸化作用などに働きかけるものとして、アミノ酸、ニコチン酸、GHB、ジランチン、エルドールバなどがあります。A4Mでは、それぞれの人に適した薬品や栄養剤を紹介し、安全で効果的な使い方をアドバイスします。また、相談すべき専門家を紹介したり、効果を最大限にする食事、運動、副作用の避け方などの指導も行っています。いずれにしても、アンチ・エイジング・プログラムを始めるためには、まずこの分野に詳しい医師に相談をしてください。

佐多: ホルモン補充療法と聞くと、癌をはじめとする副作用を心配する人も多いかと思います。ホルモンに関しては、十分に理解されていないかったり、誤解されている部分がまだまだありそうです。

ゴールドマン: だからこそ専門家の指導による正しい処方が必要なのです。日本でも、この4月に「日本抗加齢医学研究会」が発足しました。この研究会はGH補充プログラムの具体的実践方法を含め、今後、私たちと密に連絡をとりあっていく予定です。

佐多: 抗加齢医学に関して、倫理的、心情的な理由で、疑問を投げかける人もいるかもしれません。「老いる」ことは自然なこと、それを止めようとするのは自然の摂理に反することではないかと。

ゴールドマン: 人間の歴史は、病気の克服とサバイバルの歴史という一面があります。人間の寿命は、ローマ時代に比べて3倍、20世紀に入ってからも25年延びています。私たちは20世紀の初めまで、肺炎、結核、インフルエンザ、下痢など、感染性の病気で命を落としていました。それらに対して次々と新薬、ワクチンが開発されて、今では下痢で死ぬ人はいません。あとは、心臓発作、癌、脳卒中ですね。老化が、治療可能な病気ならば、これに取り組むのは、むしろ当然のことだと思います。

アメリカでも本格的普及はこれからです。現在7000万人以上のベビーブーマーたちが40代、50代、あるいは60代の前半に達して

いて、彼らは皆、なんらかの解決法を必要としています。私たちの公式ウェブサイト(www.worldhealth.net)には、月間150万件のアクセスがあるので、その関心の大きさがわかります。

佐多: 平均寿命が世界一の日本も、近い将来本格的な高齢化社会を迎えます。これを支えていくにはどうしたらよいか、様々な方面から検討が行われていますが、抗加齢医学が大きな役割を果たすことになりそうですね。

ゴールドマン: 今のままでは、私たちの社会は本格的な高齢化社会を支えきれないかもしれません。医療の問題、介護の問題など、若い人たちに頼るのにも限度があります。社会の存続に関わることなのです。GHをはじめとする抗加齢医学の進歩で、人間の平均寿命は100歳あるいは120歳にまで延びる可能性があります。けれども、たとえば80歳、90歳の人が、隠居生活を送るのではなく、今の50歳、60歳の人たちと同じように元気に働き、消費生活を営むようになれば、高齢化社会の概念そのものが変わります。生涯に1つのキャリアではなく、2つ目のキャリアも経験できる。知識、経験を活かして、若い人たちの教育にあたるのもいいでしょう。この分野の進歩は、私たちのライフ・スタイル、人間の生き方を完全に変えてしまう可能性をもっています。人間性の回復、人生、老い、死、死すべき運命、不死について、全く新しい定義を創り上げてしまうことでしょう。

佐多: 博士ご自身のアンチ・エイジング・プログラムは、いかがですか。また、ご家族の方は?

ゴールドマン: ビタミン剤の形でトレーニングや食事と組み合わせる形で20代の頃からいろいろなものを取り入れています。今45歳ですが、いろいろな検査でも生理学的年齢は22歳と出ています。身体的にあきらかに変化しているのがわかるし、快適に過ごしていますよ。実は私はまだ独身なのです。スケジュールがいっぱいで、なかなか結婚をしている暇がないんです。でも100歳まで生きるとしたら、時間はまだまだたっぷりありますからね。(笑)

セメックスを用いた 頭蓋骨形成術

神吉 利典

脳神経外科領域における「頭蓋骨形成術」には、以前より、実に様々な補填材料が使用されてきました。今回は、数々の臨床経験の中から、最も簡便で、有効的な頭蓋骨欠損補綴用の人工材料を紹介したいと思います。

1. 「頭蓋骨形成術」とは？

脳神経外科領域において、顔面骨や頭蓋骨の欠損などの臨床症例に対して行われる形成的な手術を、一般的に「頭蓋骨形成術」といいます。「頭蓋骨形成術」の、主な対象症例は、頭蓋骨を欠損する全ての症例ですが、具体的には頭蓋骨腫瘍、頭蓋骨を侵襲した脳腫瘍摘出術後の頭蓋骨欠損、陥没骨折、外減圧術後の頭蓋骨欠損などがあげられます。

2. セメックスを使用した「頭蓋骨形成手術」の方法

「頭蓋骨形成手術」を行う際、まずは手術室の温度が21～23になるよう心がけます。手術部位が感染している患者さんや、セメント等の異物に対してアレルギー反応をおこす患者さんには、使用する事はできません。

麻酔は全身麻酔で行うのが一般的で、病変の部位により適切な体位を取るようになります。欠損部位では、標準的な開頭アプローチを行い、止血などを確認した上で頭蓋骨の欠損部位を剥離します。欠損部位の準備が終了次第、骨セメントの準備に取り掛かります。

まず、アンプルの中の液体をボールに注ぎます。その後、ヘラで粉末と液体を混合します。完全に混ざり合ったら、そのまま1～2分間静置します。最後に、ボールからセメントを取り出し、手で形成します。「セメックス アイソプラスチック」は粘性が高いので、このように手で簡単に形成する事ができます。頭蓋骨の欠損部位の形に合わせて、さらにきめ細かく形成して行きます。欠損部位と形成したセメントがぴったりと合うように、お互いの切り口を斜めにし、形成した骨セメントが脳実質(脳みそ)に落ちこまないようにします(まるで大工さんのようですね)。繰り返し、形成作業を続けて行きます。ここでの作業が、術後、患者さんの美容に大きく影響するので、特に真剣に行います。(脳外科医は非常に大変なのです。)



神吉 利典 / かんき・としのり
神奈川県立厚木病院脳神経外科部長
1953年 兵庫県生まれ
1979年 東京慈恵会医科大学卒業
1985年 脳神経外科専門医
1989年より現職

粉末と液体を混合してから、硬化するまでは約9分間です。この間に一服したいところですが、開創部位の適切な処置をしなくてはなりません。

次に固定する作業に入ります。形成した骨セメントの表面に、小型のドリルで幾つかの小孔を開けます。これにより、術後数年を経て、患者さん自身の皮下線維組織が穴に入り込み、人間の自然治癒力によって骨セメントをしっかりと固定するのです。

以前ですとこの後に、ワイヤー等を利用して、残った自家骨と骨セメントを固定する作業が待っていたのですが、今流行のチタン製プレート等を使用する事により、作業がよりスピーディーに、より簡単に行えるようになりました。

最後に、止血を確認した後、閉頭します。術後のフォローアップは、レントゲンなどで確認します。

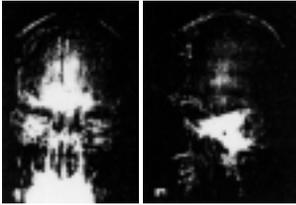
3. 「セメックス アイソプラスチック」の特長とは？

「セメックス アイソプラスチック」は、国際標準機構(ISO)の基準を満たした高品質な製品です。粉末(ポリマー)と液体(モノマー)の二つの材料を混ぜ合わせて作ります。ISO5833/1の試験基準では、重合熱の最高許容値は90 ですが、それに対しセメックスの重合熱は55 程度しか上がりません。レントゲン不透過性のため、鮮明なX線画像がとれますので、術後のフォローアップも簡単にできます。粘性が高く、競合他社製品と違って、手で簡単に形成する事ができるので、手術時間の短縮にもなります。さらに、硬化時間が短いので、準備の時間が短くて済みます。一回当たりの使用量が適当で、無駄が無いので地球にも優しい製品です。また、重合熱が低いことにより、患者さんの患部へのダメージを少なくすることができるのです。

4. セメックスを用いた症例

それでは実際に、我々が「セメックス アイソプラスチック」を使用した代表的な臨床症例を、以下に紹介してみましょう。

患者さんは28歳の男性です。当初より風邪のような症状が続き、近所のかかりつけのお医者さんに診察してもらっていました。その4日後に痙攣発作を2回おこし、我々の病院に搬送されて来ました。



セメックスを用いた頭蓋骨形成術「後」のX線写真



術後3D-CT写真。
前頭骨が形成されており、前頭骨、眼窩上縁に、左右差がほとんど認められません。

CTによる精密検査をしたところ、画像上、異常な影を発見し、さらに詳しい検査を行うため、入院する事になりました。

入院後、頭部単純撮影を行ったところ、右前頭洞、前頭骨を中心に薄い影のような部分があり、さらに良く観察すると、頭蓋骨上に腫瘍を認める事ができました。頭蓋骨上の腫瘍であるため、手術で摘出したとしても、この部分の自家骨を再使用する事はできません。

その結果、欠損部を「セメックス アイソプラスチック」で補填する事になりました。上記で説明した通り、この製品は粘性が高く、比較的長い時間、手で形成する事ができるので、他の製品と比較して、丁寧に作業をする事ができます。このため、美容的側面から見ても、頭蓋骨を、美しく自然な状態にする事ができるのです。(写真参照)

また、画像上、補填部位を鮮明に映し出す事ができるので、退院後のフォローアップも十分にできると思われます。この患者さんは、手術後の経過も非常に良好で、元気に退院されて行きました。

5.まとめ

以上、脳神経外科領域における「頭蓋骨形成術」を紹介しました。「セメックス アイソプラスチック」は、我々が行った実際の臨床経験から判断しても、数ある骨欠損部補綴用の人工材料の中で、極めて有用な製品であり、製品の特長から、術中だけでなく、術後の管理にも非常に有用であることがわかりました。

今後、この製品がより多くの先生方に浸透し、脳外科関連施設でのスタンダードな製品となり、より多くの患者さんの治療に役立つようおいに期待しています。

東機貿ホームページで

<http://www.tokibo.co.jp>

(英語版は<http://www.tokibo.com>)

『ヴィタリテ』誌の最新号、バックナンバーや、

「製品紹介」のページなど、

東機貿グループのいろいろな情報を、

ぜひ一度ご覧になってください。

トップページ



ヴィタリテ



製品紹介



「遠藤周作文学館」 落成記念講演会



遠藤周作文学館が長崎県外海町に完成。

落成を記念して、加賀乙彦氏、三浦朱門氏、瀬戸内寂聴氏が
「遠藤周作の作品と人柄」を語る。

5月、長崎県外海町の海を見晴らす丘の上に「遠藤周作文学館」が完成し、落成式と共に、遠藤周作の作品と人柄を偲ぶ講演会が催され、全国から遠藤文学ファンが押し寄せた。

講演に先立って、出津(しつ)教会と浦上天主堂では追悼ミサが執り行われた。あいさつの中で遠藤順子夫人は、遠藤周作の代表作となった『沈黙』の舞台であるこの土地は、神様が、自分のためにとっておいてくれた土地だ、と遠藤周作が言っていたことを披露した。

確かに、この出津の地には既に10年以上も前に「沈黙の碑」が建立されており、遠藤氏が『沈黙』を書くために何度も足を運んだという、小説のモデルとなった「ゆかりの土地」である。しかし長崎市からバスで一時間ほどの不便な土地である。

また落成式では、イタズラ好きだった遠藤氏に「いたずらしないで、晴れさせてよ」という遠藤順子氏の祈りにもかかわらず、また「晴れ女」を自称する瀬戸内寂聴氏の参加にもかかわらず、一時、遠藤周作文学館がドシャブリの雨にみまわれるというハプニングもあった。

加賀乙彦氏

「沈黙とその時代」
出津教会にて

「遠藤周作の代表作『沈黙』は、キリストン史の全てを集約し、史実を越えて、生き生きと活写した傑作であり、260年間にわたり続いた、隠れキリストンの信仰の熱き魂を伝えるメッセージでもある」と語り、史実ではありえない出会いの設定を自在に構成する遠藤フィクションのすばらしさをたたえた。

一方、加賀氏は「忠実なキリストンの歴史書は、史実は豊富だが、読みにくい」と言う。映画化やオペラ化もされた『沈黙』のほうが、過酷なキリストン時代を、歴史書以上に生き生きと今日に伝えてくれていると、遠藤氏の作品への感謝を述べた。

三浦朱門氏

「ポール遠藤周作からの受け売り
(死海とガリラヤ湖)」
浦上天主堂にて

昔と同じ様に「エンドー」と語りかけながら「遠藤が、長崎の地を私に教えてくれ、イスラエルにも連れて行ってくれた」と、洗礼の名付け親でもある遠藤氏の思い出を語った。

聖地とは、信仰が「ここだ」と教えてくれるもの、聖地を発見した「熱い思い」が信仰である、とイスラエルの聖地訪問で気付いたという。

「最後の晩餐が行われた場所やゴルゴタの丘がどこか、わからないと、キリストの存在自体もわからなくなる」としながらも「ゆるぎない信仰の上に聖地が在り、キリストの存在も、信仰の上にごそ成り立つものである」と遠藤周作からの受け売りを紹介した。

そして、この美しい長崎には、キリストン以来の強い信仰が生き長らえていること、信仰が「西の方から」やってくると感じていたため、「西の海」を遠藤氏がこよなく愛していたこと、などから、遠藤氏は日本の西端の長崎や外海町を小説の舞台に選んだのではないかと、言う。

また、信仰の厚い、多くのひとびとの心を代弁してすばらしい作品を書いてくれた「遠藤、ありがとう」と故人を偲んだ。

瀬戸内寂聴氏

「『深い河』について」
浦上天主堂にて

主催者より「浦上天主堂の中に、出家したお坊さんが入ったのは瀬戸内さんが初めて」との紹介があった後、講演の随所で、キリストンが大部分にもかかわらず、宗派を越えた満場の拍手喝采と笑いが沸き上がった。これだけ屈託なく教会堂の中で笑える聴衆も、瀬戸内氏と同様に、きつと心の広い人たちだろう。

ミサの挨拶で遠藤順子さんがトインビーの言葉を引いて「20世紀は、キリスト教と仏教が和解した時代」とお話しされたのに対して、瀬戸内氏は「両方ともガンコだから、無理に仲良くすることはない」と言いきり、聴衆の興味を引きつけた。

しかし、続いて、遠藤順子さんがキリストンでありながら、観音経を写経して瀬戸内氏にプレゼントしたというエピソードを話された。また「順子さんは、何と心の広い宗教を信じているのかと、尊敬している」との言葉を聞いて、みんな安心したことと思う。無理をしないで、宗派にこだわらず、自然体で仲の良い遠藤順子氏と瀬戸内氏の心の広さをうかがわせた。

演題にある遠藤周作の『深い河』は、単に主催者が選んだ作品であって、『沈黙』が一番好き、『わたし』・『棄てた・女』、『おバカさん』も良いと思う、と率直に語る瀬戸内氏。

1歳しか違わない瀬戸内氏を、遠藤周作が「姉(あね)さん」と呼ぶので、ずいぶん年上に見られ損をした、という。また瀬戸内氏について、遠藤さんが他人にデラマやウソを言うので、何度も戸惑ったが、そのうち本当になってしまったようなデラマもあった、という思い出話に、聴衆は何度も大笑い。

しかし、遠藤さんのウソは、人を愉快にするウソ、なぐさめるウソ、楽しくさせるウソである、として受けとめているという。「もともと小説家は、ウソを本当のことようにするのが、商売」とも語った。遠藤周作のウソは、悲しみに耐えて生きている多くのひとたちの「語られない苦しみ」を、笑わせることによって元気付けるためのウソだったと思う、と遠藤周作独特のユーモアを偲んでいた。

(ちなみに、遠藤順子氏は、この遠藤周作文学館を一つの基地として、21世紀には、今度は東から西へ、日本人が身に付けてきた節度とか謙譲とか礼節とかいった東洋の諸徳を加えたキリスト像を発信していきたいと願っている。)

ロシアの生んだ世界的チェリスト マエストロ・ロストロポーヴィッチ



2000年2月 国立小児病院にて

20世紀最高のチェリストの一人といわれるムスティスラフ・ロストロポーヴィッチ氏。力強く、感情を前面に出す演奏を特徴とし、その幅広いレパートリーと変幻自在な演奏法は、ペガサスが大空を駆けめぐるようだと言われる。意欲的な演奏活動で世界中の人々を魅了し続けるかたわらで、1992年には、医療援助を目的とする「ヴィシュネフスカヤ・ロストロポーヴィッチ財団」を設立。その連名の通り、世界的ソプラノ歌手で波乱の人生をともに闘ってきた同志ガリーナ・ヴィシュネフスカヤ夫人との共同設立である。

この財団は、米国をはじめとする世界中の医療関連企業から支援を受け、ロシアの子どもたちに医療援助を行っている。この財団によって、激変するロシア経済の中で手つかずのまま放置されている小児医療の分野で、医療機器や医薬品が各病院、施設に寄贈されるほか、ロシアの小児科医の教育研修にも力が注がれている。1998年6月にロストロポーヴィッチ氏がブルゴーニュのフォントネ修道院でコンサートが行われた時に、シャトー・ド・シャイイのホテルに一泊されたご縁から、その後、弊社長佐多保彦との親交が始まり、結果、本年5月1日より本財団理事に招かれ、また(株)東機買は、本財団の日本での事務局を務めることになった。

実際にお会いしたロストロポーヴィッチ氏は、その演奏のように情熱的で力強く、そこにお茶目で温かいお人柄が加わる。1927年、アゼルバイジャンの首都バクー生まれ。父親がロシア有数のチェロ奏者だったこともあり、この美しい音色の楽器を自然に手にとるようになった。「子どものころは練習をするように言われても、両親が出かけてしまうとすぐにやめてしまって、窓から両親が帰ってくるのが見ると、あわてて弾き始めました。弾き疲れているように見せるのに苦労したものです」身ぶり手ぶりをまじえてユーモラスに語る。それでも14歳でモスクワ中央音楽院に進学、18歳で全ソビエト音楽コンクールで優勝すると、ブラハ、ブダペストなどの国際コンクールでも次々と賞をとる。その後、30歳の若さで中央音楽院の教授に就任した。

ロストロポーヴィッチ氏はまた、『収容所列島』で知られるノーベル賞作家ソルジェニーツィン氏をかまきまい、旧ソ連政府に公然と反抗したことも知られる。「1968年からの5年間、私の家でいっしょに暮らしました。反体制のレッテルをはられ、とても人間の生

活とは思えない暮らしを強いられていたソルジェニーツィン氏を家に迎えることは、人の道として、むしろ当然のことでした。」

それ以後、自らの良心を信じ尊ぶ心は、人生を通じての生き方の指針となる。政府の弾圧に屈しないため、国家の敵とみなされたロストロポーヴィッチ氏は、1974年、遂に夫人と共に、祖国と全財産を捨ててロンドンに旅立つことになった。1978年、国籍剥奪。ゴルバチョフ元ソ連大統領が国の誤りを認め、再び祖国に足を踏み入れた1990年までの16年間、一度もその信念を曲げたことはなかった。

その強さ、情熱は、どこからくるのだろうか。「それは良心、やましさのない心でしょう。人には必ず自分の行為を問い直さなければならないときが来る。自分は正しかったと信じている人にとって、良心は力を与えてくれるものなのです。」1989年11月、ベルリンの壁崩壊時には、チェロ一つを抱えて駆けつけ「壁を越えて、生活と希望を持ち込んだすべての人々のために」と言って、崩される壁の前で演奏をした。

現在ロシアでは、新世紀を担う子供たちの健康が危機にさらされている。財団では、賛同する世界中の企業、慈善団体、医療機関から支援を受け、ロシア国内の小児病院に医療機器類、医薬品、食品、医療教育を提供している。「無力な子供たちが、命を維持するための最低限のケアも受けられずに苦しんでいます。たった一台の人工呼吸器で、たった100gのワクチンで(それがなければ、死んでいったであろう)多くの子供たちを救うことができるのです。」21世紀を予測して、新しい時代、新しい人間関係のターニング・ポイントになるだろう、と語る。

「これまで、一つの国が独立した一つの家族のようなものでしたが、21世紀には、世界は一つ、すべての国が、この地球という家に住む一つの家族になるでしょう。すべての国の人々が肩を触れ合うようにして暮らす社会では、これまでとは違った価値観が生まれるはずで、私もこの新世紀を生きる若い人たちに力を伝えたい。生きている限り、走り続けて、彼らにバトンを渡したい、と思っています。」

スイス学校便り

高校の卒業試験と大学入学資格試験

を兼ねるMaturを経験して(2)

米川 恵子



米川 恵子 / よねかわ・けいこ
1979年京都生まれ。
1993年よりスイス、Zürich(チューリヒ)郊外のZumi kon(ツミコン)市在住。
2000年 Zürich州立Stadelhofen(シュタデルホーフェン)高校ラテン語科を卒業。

さて、そのMatur試験ですが、筆記試験と口頭試験の2部に分けて実施されます。例えばラテン語の筆記試験ではprima vistaの文章(これまでの授業や教科書に出てこなかった初めて目にする文章)をドイツ語に訳します。昔の賢人の作品から抜粋された長文が1題出されるのですが、私たち場合はキケロの文でした。ドイツ語の試験では与えられた4つのテーマから1つを選び、作文を書きます。日本の高校では、国語力を育て文章表現をみがくという作文教育がどの程度実施されているのか知りませんが、こちらでは生徒にたくさんの書物と取り組ませる読書教育(とりわけ有名な古典作品を扱うことが多い)と共に、大きな2本柱として、作文には大変重きが置かれています。そしてこの2つの勉強を通してだんだんと、より広い視野で自主的に考え、自己を表現する能力が身につくようになっていきたいと思います。

先生の指導によって、入学当初は幼稚な見方や表現しかできなかった生徒も、いつの間にか見かえるほどの論理的思考を身につけ、豊かな語彙を駆使して広い発想を展開していくことができるようにまで成長していることには、びっくりしてしまいます。今振り返って考えると私たちのドイツ語の先生(つまり「国語」の先生)はたくさん「読ませる」、たくさん「書かせる」うちに巧みに教え子の資質を引き出し、人格の発展を手助けして下さったと思うので。そしてこの筆記試験はギムナジウム生活最後の総決算の作文になるわけですから、どの生徒も自分が今まで培ってきた力を作文中にフルに注ぎ込む努力をしました。

さて一方フランス語では出題された文章を読んでそれを要約、解釈、それについて的小論文を書くことが要求されました。答えはすべてフランス語で書きます。数学も地理も出題範囲は過去に習ったものすべてでした。上記のどの教科も試験時間は4時間もあったので1つを終えると、旨、くたくたでした。

筆記試験がすむと、今度はそれと同等の重みで評価される口頭試験が行われます。ギムナジウムでは普段の授業でも発言や発表に大変重

きを置かれることは以前にも述べましたが、1教科につき15分間のこの口頭試験は、私たち生徒にとって筆記試験よりももっとこわいものでした。複数の試験官(中には評価の公平を期するため大学や他のギムナジウムから招かれた外部からの専門家が必ず入るのですが)の前に出てあがってしまう恐怖についてはいまでもありませんが、その前の準備段階での大きな悩みの種は出題範囲がとても広いことでした。

例えばラテン語では、過去の授業で扱った古代ギリシャの哲学者の論述や、紀元前後に活躍した政治家や詩人(キケロ、セネカ、ヴェルギリウス、ホラティウス、オウィディウスなど)の伝記と代表作について、何を問われてもよいように準備しなくてははいけませんでした。またドイツ語においても出題範囲は広く、バロック時代から20世紀の現代文学に至るまでのドイツ文学史とその代表作11冊を読んで準備する必要がありました。

数学の口頭試験というのは、一体どんなものなのかときっと興味をもたれると思いますが、これは入室して、その場で口述される問題を即座に試験官の前で黒板に書きながら解いていくものでした。問題は十分たくさん用意しており、解ける人は時間のある限り何題でもどんどん解いていってよいのです。途中、試験官からの質問も混じります。

数学以外の場合には自分の口頭試験の始まるきっかり15分前に呼ばれ、まず準備室に入り、そこでこれから受ける科目の文章資料を受け取って、少し準備することができます。フランス語の場合、試験の2か月ほど前にたくさんの課題図書リストの中から自分で3冊を選んで、その書名を届け出ておきます。ただし、この選択の際の条件は、1冊ずつが17世紀から20世紀までの間でそれぞれ異なった世紀に書かれた作品であることです。例を挙げると、18世紀からはヴォルテールの風刺小説「カンディッド」、20世紀からはカミュの「異邦人」、という具合です。そして3冊の本のいずれかから、抜粋が口頭試験に出題されます。15分の準備時間中にそれを読んで、それがどの本のどのような場面かを思

い出して解釈しておきます。続いて再び名前を呼ばれて、いよいよ試験官のいる部屋に入ります。入室すると、最初に生徒はその抜粋文を音読し、その際の発音の正確さや読みの流暢さ、果たして内容を把握して読んでいるのか、などが観察された上で評価されます。その後、その抜粋箇所をどのように解釈するかを問われましたが、もちろんその際フランス文学史の時代的背景をしっかりのみ込んでいることが肝要でした。更に、選んだ他の2冊の本との比較なども求められました。質問も答もフランス語のみで行われ、ドイツ語を使ってしまうと減点です。

私たち生徒は、どの口頭試験でも4年半の学習の成果を15分という短い時間内に反映させるために必死の思いでした。私の父はチューリッヒ大学で毎年医学生生の国家試験の口頭試験の試験官をしていて、私とはまったく逆の立場にあります。父の話では、学生がよく勉強しているかどうかは口頭試験で「たちまちわかってしまう」のだそうです。また、よく勉強している学生が来ると、教師として大変嬉しいものだ、とも聞きました。こうしてドキドキした口頭試験が終了すると、2日後はもう合格発表でした。発表といっても名前が貼り出されるのではなく、不合格者にのみ学校から電話がかかることになっています。私たちのクラスには、在学中に成績不振で落伍して学校を去っていった人は何人かいますが、卒業試験までこぎつけた「生き残り組」22人には、嬉しいことに誰にも電話がかかってこなかったのです。

その日の夜は、担任の先生が全員を自宅に招待して下さり、先生の手作りのごちそうと生徒が作ったサラダやケーキを持ち寄って、みんなそろっての合格を祝いました。何よりのごちそうはみんなの笑顔と底抜けに明るいまードで、誰もが試験前のにしかかっていたあの重いプレッシャーをまったく忘れ、卒業後の予定を語り



合いながら楽しく過ごしました。クラスメートの卒業後の予定や進路はさまざまです。大学は10月から始まるので、それまでノルウェーの農家に住み込んで農作業を経験する予定の、大の自然愛好家で環境保護派の友人もいますし、イギリスまたはアメリカに語学留学をする人、またとりあえずは地元でアルバイトをして旅行費を稼ぐ人もいます。男子の場合は、スイスは国民皆兵制ですので卒業後間もなく初年兵学校に入学し、15週間の軍事訓練を受けるのが普通です。みんなジーンズを脱いで迷彩服に着替え、手にしていたペンを自動小銃に持ち替えることになります。

ここで卒業式当日について書きたいと思います。当日は、卒業生は早朝6時半に学校に集まり、卒業生による毎年の恒例行事、Maturstreich(卒業生のいたずら)の準備をしました。日本と比べて皆で団結して何かの共同行事をすることが大変少ないこちらのギムナジウムでは、この行事は皆がアイデアと力を出し合って行う数少ない行事の1つといえます。私たちの「いたずら」のテーマは「進化師」で、卒業生は全員化粧や衣装をつけてピエロに変身しました。その日は、卒業生以外の学年は普通授業があったので、ピエロに化けた私たちは、次々と登校してくる下級生や先生の顔に、あらかじめ用意しておいたメイクアップ道具で落書きしたり、大胆にも職員室を占領して喫茶店にしたりしました。

そしてこの行事のクライマックスは午前10時半に、授業をしている最中のすべての生徒と先生を、卒業生が校内の広場に駆り出してきて始まりました。その広場にはステージが用意されています。卒業生はこのステージに自分たちを受け持った各科目の先生を呼びだし、全生徒の前でとんでもないことを要求するのです。

例えば、私たちのラテン語の先生はファーストネームがJohannes(聖書に出てくるヨハネと同じ)というのもなるほど、とうなずけるのですが、牧師の息子で品行方正の真の紳士、いつも平静さを保ち、非の打ち所のないキャラクターなのです。もちろん生徒を怒鳴って叱ったことなどかつて一度もありません。生徒たちの間

で人望があるのももちろんのこと、同じ先生仲間からもこの人柄故に信頼されています。それよりも如実に物語るのは、わが校に新任で来られた翌年に異例の若さでたちまち副校長に抜擢されたことでした。当時誰もがこの抜擢に驚きながらも、大きく納得したというエピソードがあります。そんな先生にステージに上がってもらってから卒業生が要求したのは、なんと「30秒間ノンストップで口汚くのしり続けること」でした。このアイディアは予想どおり、全校生をアツといわせ、その反響とどよめきで結局、肝心の先生の声がかき消されてしまい、残念ながらよく聞こえなかったというおまけ付きでした。

また校長先生も授業を持っておられ、数学を教えてもっていたのですが、いつものしかめっ面の上に、ピエロのカツラと付け鼻で曲芸をしてもらいました。また何でも鋭く見抜いてしまわれるので決してごまかしのきかなかったスーパーインテリのドイツ語の女性の先生と英語の男性の先生に、「ロミオとジュリエット」のクライマックスの愛を語り合うシーンを熟演してもらったりして、日本の学校での先生と生徒の関係からはおそろく想像し難いようなシーンがくり広げられました。もちろん、校内で爆笑の渦だったのは言うまでもありません。

こうして盛り上がったMaturstreichの行事が終わると、卒業生はひとまず家に帰って化粧などを落とし、夕方からの卒業式に向けての支度をしました。卒業式は学校のすぐ近くにある、あまり大きくないフランス教会で行われ、Maturを共に心から祝ってくれる両親は当然のこと、祖父母や兄弟姉妹など家族のメンバーの誰でも歓迎されたので、すぐに人であふれました。ちなみに、わが家では何か月も前から、この時間だけは父の予定を空けておいてもらうように頼み、卒業式に列席してもらう予定でしたが、あいにくこういう時に限って緊急の手術が入ってしまい、式には間に合いませんでした。母は来た時すでにたくさん人があふれていて、もう席がなく最後まで立って見ていたそうです。

式は、まず生徒によるオーケストラの演奏で

廠かに始まりました。その後、来賓である作家の祝辞に続いて、校長による卒業試験結果の発表と報告があり、それから一人ずつ名前が呼ばれて卒業成績証明書が手渡されました。これを手にした瞬間、これで本当にすべて終了したのだ、という実感が湧いてきました。全員に卒業成績証明書が渡された後は、それまでの狂乱なクラシック音楽とは違って、プラスバンド部の演奏する晴れ晴れとした軽音楽の曲目になりました。やがて会場は新設成った講堂に移され、そこでの軽い立食パーティは、卒業生とその保護者が、お世話になった先生方や親しい友人と談笑する最後のチャンスを提供してくれました。全体として、スイスらしいとても質素で簡素な式であったことが良かったと思います。

Maturを終えた今、これまでの常に期限にせきたてられていた生活にひとまず区切りがついて、卒業できた安堵感と満足感を感じると同時に、この終わりは新たな始まりだと感じます。実社会に役立つ専門知識はこれから身に付けていかなければならないからです。在学中、特に成績の危機はなかったものの、たくさん試験を乗り越えて、こうしてギムナジウムを終了できたのも、いつも私を温かく見守り、サポートしてくれた周囲のたくさんの方々のお陰です。私の両親、日本にいる家族、それから授業中に容赦のない厳しい質問攻めに悲鳴を上げつつも、いつもその高い知性と質の高い優れた指導力に感服させられてばかりだった私の恩師の先生方、青春の4年半を共に過ごした友人たち、心から感謝します。

出会い(14)

修道生活きのうきょう

トンスーラ

奥村 一郎



奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりパチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

一般的には、余り関心のないことかもしれないが、大聖年とよばれる西暦二千年を迎えたカトリック教会の歴史の中で、第二パチカン公会議といわれる世界司教総会は、前古未曾有の画期的会議であった。1962年から1965年にわたって、ローマで開かれ、急速に激変する現代社会に対応すべく、それまでの閉鎖的教会から開放的教会へと、極めて大胆なコペルニクスの転回が、あらゆる領域にわたって行われてきた。そのために当然起きてくるものは、保革激突である。今ここでは、カトリック教会の修道的伝承のごく些細な個人的体験の事例を前号に続いて紹介させていただく。私がカルメル会に入会するため渡仏したのが、今から五十年前、1951年6月のことであり、第二パチカン公会議を十年以上さかのぼる。

トンスーラ(TONSURA : ラテン語)

中世カトリック教会の修道者の習慣には、トンスーラという剃髪習慣があった。司祭叙階にも同じような儀式があったが、ここでは、後ろ髪にハサミをいれて、2~3センチぐらい丸く刈り取る一種の通過儀礼であった。修道者のトンスーラは、それとは異なり、十字架上のキリストの頭にかぶせられたと聖書に記されている茨の冠を想起させる形で頭髪を輪の形にする(参照マタイ27.29並行箇所)。それをトンスーラと呼ぶのだが、毛がのびてくるたびに、また新たに剃らなくてはならない。日本昔話では河童の頭を連想させる。西欧中世を取材にした映画や絵画には、折にふれてそのようなトンスーラの修道者を見られた読者もあることと思う。俗世を捨てて修道の生涯を神に捧げる象徴である。仏教の剃髪にも似ている。いずれも特殊な修道の風習であり、修道院内で互いに髪を剃り合う習慣であったことは、仏教の出家僧の剃髪と同じ。

そのとき知ったことだが、人間の頭も、左右同じようできて、同じではないということであった。指二本の巾の輪を作るようにといわれて、右から始めていくうちに、左側になると髪巾がちがってくる。そこで狭い方の髪にあわせて、広い方を刈りこむ。するとまた刈りこみすぎて、片方が広くなりすぎてしまう。そんなことを繰り返しているうちに、とうとう、わたしが刈った修練長殿の頭は、虎刈りの丸坊主になってしまった。しかも途中で古い

バリカンのこぼれ歯に髪が引っかかると、髪の毛を引き抜くしかない。「あっ痛い! こら、人殺し!」と叱られながら、心の中で「ご免」というのが、精一杯。なにしろフランスではその頃、丸坊主の頭は刑務所にいる囚人だけだと教えてもらった。キリスト信者はキリストの囚人である(エフェソ 3.1, 4.1)、というような立派な事とは、話がちがう。丸坊主の髪がのびるには、ほぼ一ヶ月かかる。こんなマンガチックな修道生活一年生の小さいできごとが、今では、懐かしい思い出のひとつとなる。

こうしたトンスーラの習慣は、第二パチカン公会議が始まる頃から姿を消していった。その後1972年には公式に廃止されて、若者並みの長髪神父や修道者が登場するようになった。それとともに、修道の生活規則全体が弛んできた。トンスーラは、そのひび割れを示す一事例にすぎない。その頃「世俗化の神学」が真剣に問われたが、結局、俗化の潮流に呑みこまれていく危機がカトリック教会にも生じた。なにごとでも、築くには時間と忍耐が要るが、壊すには、力もいらず、たちまちに捨て去られてしまう。そこでは捨てるべきものと捨ててはならないものを識別し、新しいものを創造する知恵と勇気が求められる。

そのうちの、トンスーラはおそらく捨て去られてもよいものであったであろう。しかし、そこに象徴されていた、キリストと共に父なる神に自分の生涯を捧げる受難の意味は、失われてはならない。それに信仰生活は具体的な形なしては育たない。ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、前教皇パウロ六世の意向について、修道服の着用を強調し続けてこられたのも、その意味をもつ。教皇ともあろうものが、服装のような事にこだわるのはおかしい、というだけではすまされないものが、そこにあるのではなからうか。



向かって左列の前から3人目が筆者

人間の不思議は、「身心一如」即ち、体と心とは一つのものであって、いつも両者の調和が見出されなくてはならない。孔子の言う「中庸」、仏教の「中道」、そしてカトリック神学の基底となってきたギリシャの聖哲アリストテレスの言った「理性的中間」というのは、すべて同じことを意味する。今ではトンスーラに代わる一分別りが、観想修道会や、修道の刷新をめざす共同体の中にも、静かに広がりつつあるのは、何かよい方向を示唆しているのではなかろうか。真の創造は、単なる新奇を意味しない。伝統に根ざしてのみ、創造は可能である。

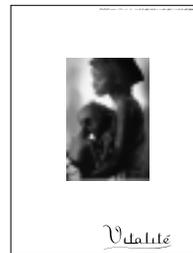
大学で教えていた頃のコボレ語が思い出される。カトリック校であったので、「カト研」というグループがあった。幾人かのカトリック学生と一般学生がிரிまじっていた。そのうちの一人の女子学生が言った質問が思い出される。

「この頃、ローマン・カラーの代わりに、ネクタイをつける神父さんや、修道服をやめて私服を着るシスターが増えてきたのは、一般の人たちにも親しみを感じさせるためと聞いたけど、わたしには、よく分からない。今も昔の僧衣を身につけ、丸坊主の修行僧や尼さんの方が、ずっと親しみを覚えるのは、なぜかしら？」

仏教とキリスト教では、宗教的体質が大きく異なるとしても、現代社会への対応の仕方は、双方とも、既成宗教の場合、まことに、ごちない。「宗教なき現代。現代なき宗教」という名言を残して去ったのは、哲学者西谷啓治であった。既成宗教の現代への不適應は、余りにも世俗化した新宗教によって補われるものではない。まして、警察沙汰になる邪教を好悪な手段をもってひろげる新々宗教には、現代も未来もない。問題は錯雑であり、その悪の根は深い。

一女子大学生の問いは、宗教的人間像の現代的視点を示しているように思う。「本(もと)立って、末(すえ)生ず」は、どの宗教にも、その本質が今、問われている。余りにも末梢的な日々の生活に追われて、「唯一の必要なもの」が見失われているのが、現代の病いではなかろうか。

表紙の写真



クリス・スティール＝パーキンス
『ソマリアの母と子』1982年(原画はカラー)

それは「ソマリアの母と子」と題された三枚組みの写真でした。内線が続くソマリアでは、飢餓や病気で数え切れないほどの大勢の子どもたちが死んでいきつつあります。クリス・スティール＝パーキンスの写真は、その悲しい現実を柔らかな光を取り込んだカラーフィルムで写し撮っていました。痩せ細った母親の腕に抱かれ、その乳房を求める赤ん坊の小さな頭には大きなハエが止まり、落ち窪んだその眼からはわずかな生命力も感じられません。若い母親の表情も悲しそうです。あまりにも哀しい写真。しかし、淡い光のなかに立つふたりは、なんと神々しい母子の姿なのでしょう。

「現代の聖母子像のようだ…」と、わたしはその写真の前に釘づけになってしまったのです。

山田美也子著 『ふたたび「愛する」ということ』(晶文社2000年)より引用

メッセージ

母と子のいのちはずつと
つながっている 昼も夜も
一緒に呼吸し
一緒に見つめ
一緒に驚き
一緒に食べている

わが心の遍歴

(4) 参禅(FAS禅と伝統禅)

花岡 永子



花岡 永子(別姓:川村 永子) / はなおか・えいこ
1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学哲学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'87年師家(しげ)の印可証を授与され、女性の老師となる。'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化学研究科教授として哲学、宗教哲学を教える。著書は『宗教哲学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教哲学』(新教出版社、'94)、『禅と宗教哲学』(北樹出版、'94)、『キェルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

誰よりも元気があった夫が亡くなって、呆然としていた頃、悲しみを忘れて何かに打ち込むように、とのお心配りである。それまでご指導くださった先生方や周りの方が色々仕事を与えて下さった。

先ず武内義範先生が浄土真宗のご住職をしていらした四日市のお寺に、1週間程お招き下さった。先生の日本語のご論文をドイツ語に翻訳するように、というご依頼であった。お訪ねしてみると、翻訳はほんの僅かで、実際には先生の大きなお寺を先生と御奥様と一緒に見て頂き、お寺の大きなお庭で、薩摩芋を少し掘らせて頂いたり、大きなご尊宅の大きな書庫を見て頂いたりして、生きる力を付けて頂いたのがあった。帰宅する頃には、何か生き続ける勇気が湧いてきていた。全く思いも掛けない先生と御奥様のご配慮に、今も尚、心は大きな感謝の念で一杯である。ご尊宅ではキリスト教神学者のR.ブルトマンやP.ティリヒ等が先生のお家を訪問された際の色々な議論や珍しいお話を聞かせて頂くこともできた。その1週間にはその後の現在迄の筆者の人生に色々参考になることを沢山お教え頂くことができた。

また、西谷啓治先生からも先生のお書きになった「ゲーテと世界文学」のドイツ語への翻訳を承ったりした。しかし私の人生を大きく転換させることができたのは、西谷先生から承ったドイツの神父様の著書日本語に翻訳する仕事であった。それは、ドイツのボン大学のH.ヴァルデンフェルス教授著「Absolutes Nichts」(絶対無:西田哲学の用語で、神は絶対無と理解されている。絶対は絶対の自己否定を、無は無実体を意味する)の後半部分の翻訳であった。これは、西田哲学、田辺哲学、西谷哲学の研究書であったので、ドイツ語を通じて幸いにも、難しいこれら三哲学者の哲学を学ぶことができた。それのみならず、そこには禅の詳しい解説も入っていた。その上、ヨーロッパのカトリック神学者の眼を通しての大乘仏教理解は、ヨーロッパでプロテスタント神学を学んできた筆者には、西田哲学や田辺哲学を直接に学ぶよりは、遙かに理解し易いものであった。

1.FAS協会への入会

夫の亡くなった翌年の1978年に、先ずFAS協

会に入会した。京大の文学部時代にP.ティリヒの講読で2年間お世話になった阿部正雄先生のご紹介であった。FAS協会は、久松真一博士によって、第2次世界大戦敗北直前に京都で学生の仏教求道者を中心にして創設され、今も尚、存続している仏教協会である。FASは、Formless self, All humankind, Suprahistorical history(無相の自己、全人類、超歴史的歴史)のそれぞれの頭文字である。

FAS協会には3年間通い続けた。外国人もいつも数人参加していた。その中には現在既に大学の教授になられた方もいる。その間のFAS協会の責任者(指導者)は、花園大学の常盤義伸先生であった。FAS協会には、平田精耕老師様や今は既に亡き藤吉慈海先生が、また辻村公一先生や柳田聖山先生も会員としてご在籍であった。土曜日毎の例会や年3回の接心においての論究は、実に活発なものであり、色々な意味において、実生忘れることのできないものであった。花園大学(山田)無文館の2階の座禅堂でも接心が、この3年間に幾度も開催された。

また妙心寺の雲霊院ではその頃、冬の1週間の接心があり、3年間で3度参加した。凍てつくような荷物だらけの物置に、女性数人で2~3時間の夜の睡眠をとったことも、懐かしい思い出となっていた。ある夜等は、畳20枚を縦に積み上げた上に筆者が眠り、その下の1畳位の隙間にドイツの修行中の女性が眠る羽目に陥ったこともあった。もし筆者が畳一畳の上で万が一にも寝返りを打って落ちることがあれば、下に寝ている方は、致命傷を受けることは必至であった。寝相の悪い筆者には、正にそこで無事に一夜を過ごすことこそが修行の第一歩であった。

また、忘れることのできない接心としては、竜安寺での接心が挙げられる。それは、竜安寺の畳の間から石庭を目の前にしての、花園大学主催の特別な接心であった。その夜は、丁度仲秋の名月の会であったので、修行中の誰にとっても、正に「天地同根、万物一体」にして、同時に「天上天下唯我独尊」の経験が可能となるような夜に思われる程に、美しく、清々しかった。その経験は、今でもそのまま、筆者の心に生きている。

座禅を始める数年前から読みはじめていた、

大森吾玄著の『参禅入門』や山田無文老師の禅関係の書が実地大いに役に立った。それのみか、山田無文老師や大森吾玄老師は、FAS協会で行方不明中、筆者が就職した花園大学の学長でもあった。色々な偶然の幸運が重なった。H.ヴァルデンフェルス教授の翻訳もこの期間に成し、すべてが禅へと収斂していくようになっていった。研究会では、西谷啓治先生が顧問をなさっている「西田哲学研究会」で西田哲学を読み、1981年から1992年までは、平田精耕老師様が代表者で、西谷先生が顧問(1981-1990)であられた京都禅シンポジウムで禅の研究をさせて頂いた。偶然とは言え、大変に恵まれた境遇で、生死を越えて個の自己と万物の自己との一体の境涯に生きることでできるようになった、生涯続く修行の旅に、何はともあれ出かけることができたのは、どんなに感謝しても感謝し切れないことであった。

しかしFASに入れて頂く時にも既に、将来は是非とも相国寺(しょうこくじ)の専門道場で修行したいという希望を持っていた。久松真一先生は、伝統的なお寺の内部で行なわれてきた4500程ある公案を、ただの一つの公案に纏(まと)められた。「どうしてもいけなそうとすれば、どうするか」という一つの公案に、である。しかも指導者の老師もいないという新しい考えをお出しになった。しかし、創造的なものは、どのような領域であれ、伝統を踏まえたところからしか出てこないのではないが。勿論、時代と共に、参禅の方法も人間のあり方も、またものの考え方も変化することであろう。しかし先ず伝統から学ぶことをしないならば何事も長続きはしないであろう。

そこで、学生時代以来ご指導頂いてきていた西谷啓治先生の修行されていた相国寺で何とか参禅させて頂きたいという希望を最初から持っていた。女人禁制の道場であったために、筆者の参禅については色々な問題があつたようであるが、西谷先生のご推薦でその願いも叶(かな)い、間もなく相国寺管長の梶谷宗忍老師様に相見することができ、弟子入りすることができた。正に「タバに死すとも可なり」の思いがけないわけではなかった。しかし、やっと伝統禅の流れの中で修行が可能になっただけで、道が何であるかは未だ分からなかった。それに、修



1996年春のハンブルクのダムトローア駅前にて。
向かって左が、竹内義範先生、右側は筆者。



1994年夏、スイスのある修道院にて。
向かって右が、H.ワルデンフェルス先生、中央は筆者。

行もしないで死ぬことは全く許されないと
思い、数年間、来る日も来る日もただ独参に
通いつけた。

2. 因陀羅の網

長い独参の日々から、道とは、「真の自己と
は何か」に覚えて、ただ無心に生きることを意
味することが分かった。このことは、華嚴経の
中の、因陀羅網(いんだらもう。「帝釈天の網」
ともいう)の譬(たとえ)によって説明するこ
とが最も適切であろう。この譬とは、悟りの
世界には因陀羅の網が掛かっていて、その網の各々
の結び目には珠玉があり、それらの珠玉は相互
に映し合い、相互に映った珠玉は、丁度鏡と鏡
が映し合っているように、さらに相互に映し返
し合っていて、その映し合いの関係が無限に続
いていくというものである。丁度この譬えにお
いてのように、私たち人間は、すべての人々や
動植物や物と相互に全存在を映し合ながら生
きている。そして、一々の人や動植物や物は絶
対の中心であると同時に、周辺でもあるという
仕方できているということを「自ずから然(し)
かる」(自然な「道」として生きるというのが、
この譬えの意味していることであろう。

ところで、哲学者(正確には哲学以前にして
哲学以後の世界をも含めて、思索するのみなら
ず、それを生きる哲学者としての「宗教哲学者」)
は、この事実を自覚しなければならぬ。しかし
この世で生きていくためには、先ずこの道が
「自ずから然かる」という意味で自然に日々生
きられることが肝心なことであると理解される。
宗教哲学者は、この事実を説明しないし反省し、
他の諸科学や生活領域との関係を関連づけな
ければならぬ。しかし、すべての人が宗教哲
学者になるわけでもないから、またならねば
ならないわけでもないから、先ずそのような境
涯で生き得ることが大切である。もしそのよ
うな境涯で生きることができれば、諸科学も諸
生活領域も、根本的に変わっていくことであら
う。

3. 伝統禅

お寺の伝統の中での制度に従った所謂(いわ
ゆる)伝統禅での修行でも、貴重な経験が与え
られた。FAS禅においても伝統禅においても、
先ず跏趺坐(けっかふざ)といって、胡座(あ

ぐら)をかいた状態で、先ず右足を左足の太股
の上に足の裏を上に向けて載せ、その後で左足
を右足の太股の上に載せ、背筋を真っ直ぐに
して、呼吸を整え、無心に瞑想するのが座禅の修
行の基本である。しかし、椅子や切り炬燵で育
った筆者には正座も満足にはできなかったで、
最初の3か月間は半跏(はんか)といって、片足
しか組まない状態で座禅する仕方があるが、そ
のような仕方では座るのが精一杯であった。その
後、やっと正式に結跏趺坐(けっかふざ)するこ
とができるようになって、30分毎の経行(きんひん=座
禅中の30分ないし1時間毎の5分程度の歩く運動)
のために立ち上がる時には、痺れのために足に
感覚がなく、爪先立ちにしか立てず、直ぐにス
ッテンコロリンと引っこ返ることが多かった。
無事に座れるには1年以上の年月が必要であっ
た。

しかし、座禅は必死であった。夫の死後は、
自らの体が丁度半分無くなったようで、真っ直
ぐ歩けない程、平衡感覚も失われていた。昔、
学生時代に読んだ夏目漱石の短編小説『硝子(ガ
ラス)戸の中』に出てきたある老夫妻の心の内
の思い(この年で相手が亡くなれば最早一人で
は生きていけず、直ぐに死んでしまおうであら
うという思い)を思い出したりもした。何はさて
おき、ただ自己として生きられるようになれば、
どんなに引っこ返っても構わなかった。
しかも、夫との生活が終わった限り、ただ生き
るのは、もうたくさんであった。真の自己とし
て生きたいという思いだけであった。その間の、
西谷啓治先生が顧問であった西田哲学研究会の
読書会は、座禅の大きい助けとなった。

心配していたお寺も、中に行けば行く程、女
性差別は無かった。真の自己に目覚めようと努
めている人々が多く、気持ちが悪くするのみ
であった。お寺様に「命をかけて座禅をした
と思っている優秀な女性がいたら、紹介して下
さい」とまで仰って頂く程に、お寺の中は開け
ていた。実際、4、5人の優秀な女性をご紹介し
たのであった。しかし、色々な事情で、その当
時一緒に修行した筆者以外の女性は、残念なが
ら座禅を相国寺で続けることができなかった。
参禅は、やはり大変に厳しかった。真の自己に
目覚めることを、自らの生きる第一の関心事と
しない限り、その目的は、当然のことながら、
不可能なのであろう。

伝統禅で修行をされた先生方の中には、FAS
禅に理解を持たれる方々が幾人かいら(5人)。西
谷先生、辻村先生、平田精耕老師様や花園大学
に教授として赴任して来られた秋月龍(りゅう
みん)老師様方がそうであられた。伝統禅と
はいえ、FAS禅とは何か親戚関係にあるような
近しさで、色々両者の関係について、前もつ
て、理論的にのみならず、修行中にも、またそ
の後の生活においても、両者の修行方法の比較
も自らできるので、両者の禅を経験し得たこ
とは、その後の自らの歩みにとって大変良い道
であったと思われる。

世間の判断とは逆に、伝統禅にも柔軟な道が
あり、FAS禅にも我流に陥る危険もあることが、
自らの道の歩みの中で明らかとなったことは感
謝すべきことであった。勿論、その逆の例もあ
り、要するに、自らが真剣に道に励まなければ、
いずれの禅であれ、道を外れる危険は常に存
することは言うまでもないことである。

4. 禅での歩み

禅の修行を始めてからの禅に纏わる大きな出
来事といえば、1992年8月にアメリカのロサン
ゼルス禅センターとニューヨーク州の山奥にある
大菩薩禅堂金剛寺に出かけたことや、1997年8
月にオランダのDe TiienbergでのFAS協会の会
議や接心に出かけたことである。今回は、前者
の米国の旅を振り返ってみたい。

1992年にはボストン大学で、東西宗教交流学
会が国際的な規模で開かれた。日本の東西宗教
交流学会からも多くの方々が参加された。筆
者も花園大学を中心とした京都禅シンポジウム
から参加し、発表をした。前者からは、秋月龍
老師様も参加された。その当時既に花園大学の
教授であられた秋月老師様から、「脳溢血(の
ういけつ)の発作の後で健康が心配故、米国
で夏休みを過ごされている東横貿易の社長様や
そのご家族の皆様、あちこちの禅センターに連
れて行って貰うが、この旅に皆さんと一緒に来
てくれませんか」という意味のお話があった。
筆者にも全く健康の自信はなかったのであるが、
脳溢血もその7、8年前に半身を不自由にされた
ご経験も伺っていたので、皆様と一緒させて
頂くこととした。

20世紀を振り返る

近代的ホテルの開業とソムリエ誕生

横山 弘和

1960年代の新しいホテル

1964年に開催された東京オリンピックは、日本での近代的ホテルの誕生と発展に大きな役割を果たしました。その頃、新しく開業したホテルは規模も大型化し、一つの建物に500以上もの客室を持つホテルも出現しました。それまでのホテルは、せいぜい主食堂とコーヒー・ショップ、酒場が一か所といった程度の設備が常識でしたが、新しいホテルは、大きく違っていました。特に1962年5月に虎ノ門にオープンしたホテル・オークラは、なんと高級な欧風料理店が三つ、コーヒー・ショップ的軽食堂が二つ、日本料理店、中華料理店に加え、酒場が二つ、更に最上階の高い場所から外の景色を眺めながら、当時やっと出回り始めた世界の洋酒が楽しめる、カクテル・ラウンジと計10か所もの飲食設備を有し、それまでの常識を破るホテルとして脚光を浴びました。

最上階のラウンジはサンフランシスコの有名なホテル「マーク・ホプキンス」のトップ・オブ・マークというカクテル・ラウンジにヒントを得て作られました。現在ではどのホテルでも当然のように最上階に飲食設備が設けられていますが、これは我が国のホテルとしては最初の試みでした。同時に、それまでホテルの食堂や酒場は宿泊客の利用が主体であったのに対し、外来客の誘致へと大きく変わる転機にもなったのです。ちょうどその頃、我が国の経済成長が盛んになり、商談のため来日する外国人の数も非常に増えていました。加えて、国内でも終戦後の苦しい生活からようやく立ち直り、ややぜいたくもできる余裕のできた頃で、このような国際級のホテルのタイミングのよい開業は大好評で、ホテル・オークラは押すな押すなの盛況でホテル業界始めて以来の大成功と賞賛されたのです。

1965年ソムリエ商売の初期

そのような背景の時代の先端に行く高級ホテルに「なんでもやるから」と就職した私は飲料を管理する部署に配属されます。そして「ソムリエ」という聞いたことも無い新しい職種に任命されたのです。当時のホテルでは国際的なホテルとしての体面を保つだけのフランス、ドイツ、イタリアのワインを在庫し、サーヴィスをしていましたが専門職を置くほど力を入れていませんでした。やっと、



横山 弘和 / よこやま ひろかず
1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在佐多商会ウィタリテ事業部在籍。

私が入社する少し前に、ワイン王国フランスには「ソムリエ」と呼ばれるワインの専門職がいるということが認識されたばかりでした。

そこで人事課で面接を受けた際、「貴方はちょうどいい時に来た。ワイン・バトラー(イギリス風)という新しい職種があり、これはレストランで、ぶどう酒をセールス、サーヴィスする専門職だ」と説明されました。しかし、私にはワインに付いての知識は全く無く、どうなることかと困ってしまいましたが、人事課長はそれを承知で「勉強しながらやりなさい」と言ってくれ、ほっとしたものでした。私がソムリエに採用されたのは、要するに、この仕事があり若造の社員よりも、35才で多少人生の経験もあり、ワインのような高価で重々しい商品を扱うには適していて、外国人の客が非常に多い中、私の英語力が若い人に比べて多少まして、実践的だとの判断からでした。当時の私のワインに対する知識は極めてお粗末で、せいぜい、箆かぶりの丸い瓶に入ったイタリア産のキャンティーが代表的なぶどう酒で、スペイン産のシェリー酒はチェリーから作られていると勝手に信じていたくらいでした。本物のワインは、ぶどうだけが原料だという認識さえなかったのです。

にわかソムリエ誕生

そんな私は、それから数年間、ホテル本館の10階にあつたコンチネンタル・ルームのソムリエとして配属されました。当時、東京で一番美味しい欧風料理をサーヴィスすると評判の高かった、このレストランは連日、国内外からのVIPたちの利用で、なかなか予約ができないほど繁盛していました。そのようなお店で、にわかソムリエの私がワイン・リストを持ちテーブルを回り、ぶっつけ本番で世界の著名人にワインをすすめたのは、今考えてもこの上なく無謀だったと思います。

ワイン教本

さて、実際、任務について勉強するにもワインについて日本語で書かれた教本は今と違ってほとんど無く、二辞典がありましたが、解説がわかりにくく、読んで理解のできるものではありませんでした。そんな時、ホテルの創業者の一族で、海外での留学や生活の経験のあるK.O氏と親しくなり、ワインについての貴重な



洋書を数冊借り受け、辞書と首っぴきで勉強を始めました。そこで、欧米で書かれたワインの専門書には、大きく分けて2種類あり、一つはワインの商売、サービスなどに従事する「売る立場のプロ」のために書かれた本。そして、もう一つは、愛好家でワインを買って楽しむ人たちのために書かれた本があることに気がきました。そこで、これらの相反する本の両方を読み、研究することによりセールスに成功し、お客様にも満足されると私は考えました。

まず、ワイン・サービスのプロのために書かれた本には、いかにホテル・レストラン業で飲物、特にワインの売上が重要かを説き、工夫次第でそれを成功させ、より高い利益を生み出せることをスタッフによく理解させ、ミーティングやセミナーを開き、ワインの知識、正しいサービス法の教育を徹底することを強調しています。要するに「To sell, you have to tell. To tell, you have to know.」という訳です。また、当時多くなかったワイン・スチュワード(アメリカではソムリエより、よく通じた)という職種が、将来いかに重要な存在になるかを予測しています。それには理想的なソムリエ像として、あらゆる飲料の選択、購買、在庫管理、ワイン・リストの作成、セールス・プロモーションへの参画など幅広く責任を持つべきだと主張しています。

更にホテル内でのソムリエの地位は高く、支配人に次ぐものでなくてはならないとしています。もはやワイン・ウェイターとして、ただ食堂内でテーブルを回りワインのサービスをしていればすむものではなく、もっと頭を使う新しいソムリエ像を描いて見せます。加えて、レストランでの、お客に対してのアピール、会話、心理的なかけひきにまで及ぶ「差のつく細やかな接客法」まで説明しています。そして、ワインが売れる条件として「料理が美味しく、雰囲気良く、ワインの値段が良心的で、サービスが正しければワインの売れない理由がない」と決めつけています。

ワインマンシップ

一方、お客の立場のために書かれた本には、レストランでのワインの選び方、注文したワインが傷んでいた、美味しくなかった時の苦情のいい方、サービスが気に入った時のソムリエに置くチップについて迄、教えてくれる本がありました。また、スポーツマ



ンシップに真似て「Winesmanship」(「ワイン紳士道」とでもいうのでしょうか)紳士らしいワインの飲み方や楽しみ方について書いています。この中に、例としてよく話題になる「レストランでワインを注文して、味見をして、そのワインが傷んでいるようだったり、美味しくないと思った場合の苦情の仕方」です。例えばワインを正しくサービスするお店では、選んだ人(ホスト)に、必ずワインのラベルを見せて、ワイン名、年代等を確認してから、初めてコルク栓を抜き、そのコルクをホストに提示します。この時(ワインが健康であれば悪い臭いはしない筈ですが)悪臭がしたり、コルクを二本の指で押してみても弾力性が無く、ぼろぼろと砕けてしまう様なコルクの場合は、ワインの状態が悪い恐れがあります。これはワインという飲み物の宿命とでもいうもので、どんな高価なワインでも置く場所、置き方を間違えるとコルクが劣化し、外から空気と一緒にバイ菌が侵入してワインを酸化させてしまうのです。運悪く、そのようなワインと遭遇することは、たまにあり得ることです。よくテストしたワインがおかしいと感じた場合、どうすべきかということが話題になります。

まだ初心者で味見に自信が持てず、加えて、高級なフレンチ・レストランなどでは、周りの雰囲気を押されて言い出しかね、不味いワインを無理して飲んだり、ほとんど飲まずに残してきたり、不愉快な体験をした話を聞きます。この本では、このような場合、「ワイン紳士たるべき者は、早速堂々と係を呼び、はっきりと気に入らないことを告げ、サービス側が色々理由を並べ取り替えない時は、そのワインを片付けるように指示し、もう一度ワイン・リストを所望します。そして別のワインを選び、味見をし、良ければそれを飲みます。そして勘定書に、返したワインの値段が付いていても(ここがワイン紳士の違う所ですが)騒がず黙ってその分も払い、店を一步出たら、手帳を取り出し、その店の電話番号に線を引き、立ち去りなさい」と書いてありました。これはサービス業に従事する者にとって「お客様は常に正しい」という精神を忘れてはいけないこと、たった一本のワインを損するからと取り替えず、大切な顧客を永遠に失ってしまう恐ろしさ、など、ソムリエとしての仕事の上での良い教訓を得たと思えました。